

氏名	さいとう だいすけ 齊藤 大輔
学位の種類	博士（文学）
報告番号	乙第1830号
学位授与の日付	令和2年3月16日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当（論文博士）
学位論文題目	古墳時代の武装と境界領域
論文審査委員	(主査) 福岡大学 教授 桃崎 祐輔 (副査) 福岡大学 教授 武末 純一 福岡大学 教授 西谷 正浩

内容の要旨

本論文は、古墳時代における武器保有の実態解明をめざすとともに、地域史研究の方法論を構築するものである。構成は序章と終章をふくめた2部11章からなる。

古墳時代の刀剣をはじめとする武器や武具、馬具の流通論は、近畿地方の倭王権中枢部を中心とした一元的な理解が趨勢を占めてきた。これにたいして本論では、特定形式の武器がどのような地域で重視されたのかという分布論的に把握できる事実をまずふまえたうえで、周辺の生産遺跡の状況を確認しながら地方生産力の強弱を検討することのほうで建設的な議論につながることを論じた。そのためのケーススタディとして、倭の境界領域にあたる北部九州と、その対極にある関東をおもな対象地域とした。これによって「武装とは何か」という根本的な命題にたいする具体的なモデルと、それをもとに地域史を描くうえで汎用性のある方法論を提示した。

第I部「武器の系譜とデザイン」は、古墳時代の刀剣と鉾にかんする総論であり、本論がよって立つ武器の編年観や系譜論の基礎的枠組みを示した。

序章では、明治期以来の古墳時代武器・武具・馬具にかんする研究全体の流れについて7段階の「世代論」で総括し、筆者が属する最新の第VII世代が今後果たすべき役割と課題を展望した。そして、研究の多様化、差別化、総合化の均衡が求められるなかで、日本考古学の精密な研究成果を利用した社会発展論を志向しながら、既存学説の批判ならびに各地の主体性をふまえた地域史の樹立と糾合を本論の命題として設定した。

第1章「古墳時代刀剣研究の課題」では、刀剣研究においては1,100編以上もの論考が林立しているながら、①新資料をふまえた先行研究の批判的検討や建設的な論争、課題、展望の共有が希薄であり、論者の数だけ論点が細分化していること、②それはとりもなおさず、馬具や甲冑研究にみられるような体系的な学史を形成せず、総体としては馬

具・甲冑研究に15年から20年ちかい遅れをとりつづけてきたこと、③1970年代までに後藤守一、末永雅雄、町田章、穴沢味光らが見とおした「刀剣史」への展望が衰微し、即物的な分類と編年のドグマに陥っていることの3点を現状と課題として抽出した。

第2章「古墳時代刀剣の様式編年」では、古墳時代中期初頭に成立する倭製の刀は、中期をつうじて発展段階的に長大化、幅広化がすすむとともに、その画期にあらわれるさまざまな付随要素と組みあわせることによって、須恵器陶器編年に換算して平均1.5型式分ほどの精度で古墳編年に有用であることを示した。さらに剣、ヤリ、鉾をふくめた刀剣様式についても、長大化やバリエーションの変化などをもとに4段階に編年した。

こうした中期的刀剣様式の諸段階の背景としては、①古墳時代前期以来舶載品に頼っていた武装体系からの脱却を図る倭王権が、中期初頭に確実に倭製品として認識できる刀剣を創出したこと、②それは、倭の五王による度重なる中国南朝への朝貢における、中国漢代に発する刀剣をもちいた世界秩序システムへ参入するための段階的な政治的パフォーマンスである可能性を指摘した。

第3章「鉦本孔鉄刀の性格と展開」と第4章「外来系鉄刀の認識と儀礼」では、これまで個別にすすめられてきた装飾大刀の研究と、それに内蔵される鉄刀の分析を融合させることを目論みながら、倭系刀身と外来系刀身の認定条件を示した。

すなわち、倭系装飾大刀に内蔵される刀身本体は、全長100cm長、刃関幅4cm前後に規格化された長大なものが多く、フクラ切っ先のほか鉦本孔や茎元抉り、隅抉尻茎などの特殊な造作がともなうばあいが多い。これにたいして外来系装飾大刀は、全長80～90cm前後、刃関幅3cm前後の華奢な刀身でカマス切っ先であるばあいが多いというコントラストが明瞭となった。翻って、外装と刀身本体の製作は表裏一体であること、そして、細身の外来系大刀へたいする、長大な倭系大刀製作の厳格な意図を見出した。

また第4章後半では、集落遺跡から出土した刀身の多くが祭祀ないし何らかの儀礼の痕跡である可能性を指摘した。

第5章「東アジアにおける特殊鉄鉾の系譜」では、東アジア諸国の上位階層墓にみられる特殊鉄鉾の系譜を論じ、古墳時代後期の倭を代表する三角穂式鉄鉾の性格の解明にせまった。考察では、鉾にかんしても刀剣同様に、中期後半以降に多様化する特殊な製品群の属性を多重継承するかたちで後期前半に三角穂式鉄鉾が成立すること、そして、とくに後期後半における三角穂式鉄鉾の発信源は奈良盆地にあるものの、流通や保有には地域性が看取できることを論じた。

第Ⅱ部「境界領域の武器と武装」では、武装からみた倭の軍事的境界領域の特質を描く。

第6章「磐井の乱前夜の新羅系文物」では、古墳時代中期の北部九州における新羅系文物の集中を「磐井の乱前夜」として捉え、後期における社会構造変化の背景をさぐる。具体的には、これまで漠然と新羅・加耶系の文物が多いことが指摘されてきた遠賀川流域出土品のうち、セスドノ古墳から出土した扁円魚尾形杏葉が、新羅最大の王陵である皇南大塚南墳主槨出土品と同一規格品であることを見出し、新羅王権と北部九州勢

力の接触があったことを明示した。

西暦400年以降、軍事大国高句麗の南征という圧力下で、新羅はそれまでの倭との敵対関係を解消しようと企図し、たいする倭も金官加耶の衰退にともなって、新羅との交渉を本格化させた。5世紀の新羅系文物が北部九州に集中するいっぽうで、新羅王陵から出土する装身具にも日本列島産の硬質硬玉が多量にもちいられていることは、こうした双方向的な交流を示す。中期前半から中頃にかけて田川盆地周辺に入植した新羅系渡来集団そのものか、あるいはその後裔が、倭王権による軍事的厚遇を受けながら外交を担ったと考える。

ただし、こうした地域集団がもつ地理的役得は、次第に倭王権中枢部の思惑とは裏腹に、かえって王権による地方経営基盤を揺るがしかねない不穏分子へと化すことをふまえば、後期の遠賀川流域に最上位の倭系武装が集中するという、財の質的転換は、磐井の乱後の地域社会の変革を示すと予察した。

第7章「振り環頭大刀の展開と王権」では、筑紫の君磐井の寿墓・福岡県岩戸山古墳から出土した振り環頭大刀形石製表飾を検討し、①岩戸山古墳の振り環頭大刀形石製表飾は九州で出土した振り環頭大刀全体よりも古く位置づけられ、振り環頭大刀が九州で展開する端緒となったこと、②高さは2～3mちかくに復元でき、7世紀の福岡県宮地嶽古墳から出土した復元全長3m前後の金銅装頭椎大刀を除くと、これほど巨大な大刀の実物はないこと、③岩戸山古墳は、振り環頭大刀が出土した日本列島および朝鮮半島すべての古墳のなかで最大の墳丘をもち、倭装大刀形埴輪樹立古墳をふくめても真の継体陵とみられる大阪府今城塚古墳に次ぐ規模となること、の3点をあきらかにした。

岩戸山古墳以後の九州では、桂川王塚古墳、箕田丸山古墳、沖ノ島7号遺跡、国越古墳で振り環頭大刀の複数副葬・奉獻がおこなわれ、時の王権中枢とみられる芝山古墳や峯ヶ塚古墳、藤ノ木古墳、あるいは国家祭祀の聖域である沖ノ島7号遺跡は別格としても、山の神古墳と桂川王塚古墳など、近在する古墳における継続的あるいは同時多発的な保有は列島でも異質な状況であることを指摘した。その背景には、国造制やミヤケの設置を前後して一振ずつ配布された可能性がある。

たほうの関東では、東北・関東では振り環頭大刀の複数副葬・奉獻が希薄で、関東平野の利根川流域にまず局地的に配布されたのち、時期が下るごとに、各地の新興勢力の展開と連動しながら東漸する。

第8章「武装からみた西の境界領域」では、北部九州における新羅系威信財の入手背景や装飾大刀流通の優位性、武器の地方生産・補修能力のたかさを確認しながら、宗像地域、福岡平野広域、糸島半島の武装の意義を検討した。これによって、各地域の社会的役割が特定のデザインの武器や馬具に反映されていることを論じた。

すなわち、後期中葉以降の北部九州では墳墓の築造が規制される地域が多いなか、宗像地域沿岸部のような軍事の要衝においては、沖ノ島祭祀や胸形君を頂点として、古墳そのものの階層性を維持しつつ袋頭大刀や甲冑、広域流通形式の特殊長頸鏃を共有することにより、有事における上意下達の命令系統が担保された。

鉄や須恵器の生産、そしてそれにとまなう森林開発などを担った6世紀後半以降の福岡平野広域から糸島半島にかけて点在する集団は、三累環頭大刀や銀象嵌大刀、みずから製作・補修したとみられる飛燕式鉄鏃や瓢形素環轡などで武装しながら広範な地域社会を構築した。これは当該地域の鉄・鉄器生産にかんする研究成果と親和的といえるが、製品としての武器研究の立場からは、さらに細かい分掌のありかたを示すことができる。すなわち、共伴品や周辺の遺跡環境から、銀象嵌大刀の佩用者は部民の統括、三累環頭大刀の佩用者は対外交渉、単龍鳳環頭大刀の佩用者は軍事面を担うような分掌があったと考える。そのような地域経営の基層を支えた中心は、大野城市域の乙金周辺に居住した集団や西日本最大の須恵器窯「牛頸窯」の操業者集団、あるいは糸島半島の元岡・桑原遺跡群、とくに石ヶ元古墳群の被葬者集団だったとみられる。そして、このような在地勢力がもつ金属器生産技術や対外交渉網がミヤケ経営の柱に据えられたという仮説を立てた。

第9章「武装からみた東の境界領域」では、千葉県金鈴塚古墳を中心とした東国首長間交流の特質を描く。とくに東国の有力墳に副葬されることの多い銀装の武器を中心に検討し、倭王権中枢部の意思とは異なる関東独自の威信財システムで再分配することによって東国有力首長間の交流を形成した可能性を論じた。必ずしも北部九州の動態を分析するうえで必要な分析ではないが、倭王権中枢部と地方首長という一元的な財の流通体制だけでなく、各地域で完結した財体系によって地縁が担保される社会の存在を指摘できた。

終章「北部九州における武器保有の実態」では、東アジア諸国との境界領域にあたる北部九州勢力の武装体系をモデル化した。そして、古墳時代後期には、おなじ器物でもそれが威信財として機能する地域と機能しない地域が存在する可能性や、そもそも、おなじ武器が列島各地におなじ論理で配布されたと解釈すること自体に限界があることを示した。とくに後期の北部九州においては、畿内と同調した墳墓築造の縮小化がみられる地域が多い半面、軍事的境界領域としての宗像地域には東国に勝るとも劣らない充実度をもつことが明快となった。すなわち、磐井の乱後の地域再編をつうじて多くの既存勢力が牽制されるなか、宗像のような国家祭祀ないし国防の最前線においては、倭王権中枢部を中心とした上意下達の指揮命令系統が維持されたと考える。

ただし、磐井の乱以前から朝鮮半島との交流という地理的役得を獲得してきた旧来の在地勢力、すなわち筑紫君や肥君、そしてそれらが結びついた筑紫火君は、ミヤケや国造の設置によって弱体化したわけではなく、むしろ須恵器生産や鉄・鉄器生産を媒介としながら協業的地縁を形成し、倭国の最前線を担う人的資源ないし物資供給のセンターとしての役割を確立した。そして、そうした諸集団の最高意思決定機関である那津官家に瓦を供給した牛頸窯の操業期間（6世紀中頃～9世紀中頃）が物語るように、このような地域経営モデルは古墳時代社会のなかで完結するようなものではなく、古代律令国家成立への序章として評価すべきと結論した。

審査の結果の要旨

1. 本論文の特色

(1) 齊藤大輔氏は平成 21 年 (2009 年) 4 月から平成 23 年 (2011 年) 3 月までの 2 年間、福岡大学人文科学研究科史学専攻博士課程前期で考古学を学び、在学中に 10 本の学会・研究会発表をおさめて奨学金の全額免除を勝ち取り、修士論文を提出して卒業ののち、宇美町教育委員会、粕屋町教育委員会の嘱託職員を経て、大阪府の茨木市教育委員会の職員となったが、職場環境の問題から退職し、粕屋町教育委員会の嘱託を経て、山口大学人文学部教授の田中晋作教授のもとで学術研究員として、世界遺産である古市・百舌鳥古墳群の未整理資料の整理や、国指定遺跡である周防鋳銭司の発掘調査に携わってきた。平成 26 年 (2014) 以来、すでに共著 1 本、単著 26 本の論文を発表し、共同 2、単独 20 の学界発表をこなしてきた齊藤大輔氏は、博士論文提出に相応しい内実を備えている研究者として、既に専門の古墳時代武器研究では、全国に知られる研究者となっている。

2019 年 9 月 30 日に提出された本博士論文は、齊藤大輔氏が修士論文提出、大学院卒業後も業務の傍らに休日をあて、寸暇を惜しんで資料調査を積み重ね、学史の中で錬磨された方法論と分析技術を発展・駆使した研究の成果であり、A 4 判 280 頁 (うち図表 145 頁)、本文 122 ページ、20 万字を越える内容である。

また 145 頁の図表は、これまで数千点以上の遺物を熟覧し、1000 点あまりを精査し、自身で実測トレースした膨大な実測図と、これを組み合わせた豊富な分類図・編年図・構造図からなり、本文に劣らない価値がある。脱稿した日も発掘業務と雑務を終え、夜通し書き続け、明け方に擱筆したという労作である。

(2) 「序章」では、日本で 100 年近くにわたって蓄積された 1100 を数える古墳時代刀剣論文のほとんどを丹念に再読し、東京圏と関西を比較しながら研究の地域的傾向を整理するとともに、刀剣を含む古墳時代金属遺物の研究史を I～VII 期に分け、世代ごとの研究趨勢や志向性・特質を的確に整理したことは、特に古墳時代研究の専門家ではない人々にとっても、研究全体を俯瞰しやすい導入となっていることは特筆される。

第 1 章 「古墳時代研究の課題」では、古墳時代威信財研究 VII 段階の各段階 z の研究の成果と課題から論点を抽出し、倭王権中枢からの威信財の再分配という論調が主流の現状に対し、自らを地域からの視点をもつ研究者として学史中に位置づけ、外装の刀装具ではなく刀身本体の研究に軸足を置いて進めた点が第一の特色である。

第 2 章 「古墳時代刀剣の様式編年」では、従来舶載に頼っていた刀剣が、古墳時代中期初頭頃から帯金式甲冑と連動して確実に国産化したことを論じる。前期での生産は否定しないが、考古学的状況の確認はこの時期以降とする。倭五王時代における南朝遣使が、漢代以降の刀剣による世界秩序システムへの参入を促したとする。

第 3 章 「ハバキ本孔鉄刀の性格と展開」では、刀剣本体の特徴を外装との関係から

特質を明らかにしていく。

第4章 「外来系鉄刀の認識と儀礼」では、太く長大な倭系刀身と、細身の外来系刀身によって外装によらない系統解明が可能とする視点を提示した。

第5章 「東アジアにおける特殊鉄鍔の系譜」では、新羅の5世紀の王陵である皇南大塚南墳の膨大な鉄製武器・鉄素材を手掛かりに装飾鉄矛の意義を論じ、重装騎兵戦術の武器として確立したユーラシア長柄武器が、当初は刺した相手の体から素早く抜き返すための実用機能を帯びていた鏢付鉄矛が、新羅に伝播し、王権を荘厳する威信財に転化する過程で、単なる装飾機能へと転換しながら、さらに列島へと伝播する過程を明らかにした。その一方、5世紀後半の長身鎬式鉄矛が、甲冑や鉄鍔とともに、倭王権の威信財大系の一環として、特殊な職能に配布された結果、北部九州に偏在することを明快に説明した。

第6章 「磐井の乱前夜の新羅系文物」では、福岡県田川市セストノ古墳で出土した鉄矛・鉄鍔・金銅製品の再調査に基づき、従来5世紀末とされていた遺物群の年代について、追葬から分離された最初の埋葬に伴う遺物群が5世紀中葉まで遡ることを明らかにし、さらに従来冠帽片とされていた遺物が、新羅王陵出土馬具と同一の特徴を示し、その破片であることを明らかにした上で、倭五王時代の日新交流を明らかにした。

第7章 「振り環頭大刀の展開と王権」では、岩戸山古墳の石製表飾にも表現されている振り環頭の倭装大刀に注目し、従来の筑豊地域への外来系環頭大刀の偏在と渡来系集団や対外交渉との関係を指摘する辻田淳一郎氏らの論調に対し、倭装大刀の分布に、ミヤケとの関係を想定する。倭王権の直轄支配地としてのミヤケの性格について、軍事拠点としての役割を想定し、そうした側面から迫ろうとする。

第8章 「武装からみた西の境界領域」では、大野城市牛頸の須恵器生産集団である大神部集団に注目し、梅頭1号窯跡内に営まれた埋葬や、善一田古墳群に伴う銀象嵌大刀から論を説き起こし、性格を追求するにあたっては、地域に偏在して地方生産が想定される飛燕式鉄鍔や瓢形素環鐙に着目した。従来、生産手段である鍛冶具や鉄滓の供献、鍛冶具と在地生産と目される馬具の抽出などの研究が積み重ねられてきたが、これらの研究は、副葬された武器・武具・馬具の分析に主眼を置く主流をしめる研究潮流との対比や親和性が必ずしも整合的でなく、古墳時代研究全体へのインパクトは限定的なものにとどまっていた。一方三累環頭に代表される朝鮮半島系の金属環頭大刀についても、先進的な土地開発や経営を実現していたと考えられる北部九州の屯倉にあって、渡来系集団の果たした役割を想起させるものといえる。福岡県福岡市東区かけ塚山古墳出土鉄片の分析は、修士課程で取り組んだ篠栗町長者隈古墳の考察を再論した論考である。再検討の結果、従来、5世紀の短甲が6世紀の古墳から出土したと誤って理解されていたものが、実は全国でも稀な、新式の堅矧広板冑の破片であることを明らかにし、従来の分布論を塗り替えたばかりか、この古墳が糟屋屯倉の軍事管掌者であることを明らかにした。

第9章 「武装からみた東の境界領域」では、まず特異な形状の鶏冠頭大刀を編年

し、最古の八幡観音塚例を舶載品もしくは渡来系工人作と考えるのに対し、最新の金鈴塚の段階には、完全に倭製化している状況を明らかにした。本章で示された変遷観・実年代は、今後佛教美術史との接続可能な精度を持つ議論として注目される。

弓筈は、銀製が古く金銅製が新しいという大きな傾向をふまえ、上番した東国首長や子弟らの舎人的な装備とする従来の議論を深める一方、少数ながら西日本に確認される点に倭王権の全国との関係性をみいだした。

さらに国産の三角穂式鉄鉾が、倭王権の威信財大系を担う機能を副葬古墳の全国的分析から明らかにした。そうした成果をもとに、利根川流域など水陸交通の要衝に分布することに意義を見出した。

6世紀末に起こった倭系太刀中心から外来系大刀中心への転換の背景については、特定形式と氏族を結び付ける議論には慎重を期す一方、和装大刀と結びついた物部氏の滅亡と、その製作物を蘇我氏が忌避したと考える。

2. 評価

キーワード：「武装」「境界領域」「階層構造」「威信財」「量質転化」「属性の多重継承」「王権」「地域生産」

まず「威信財」は、韓国では「威勢品」と表現され国際的にも注目される概念だが、その概念規定がよく吟味されないまま、安易に使われる傾向がある。研究史で威信財の学史を辿りその内容を吟味する一方、213頁にその定義を詳細に記し、改めて威信財論の前提を整理したことは、古墳時代社会研究に大きく貢献する成果である。ただ九州を倭の「境界領域」と捉え、関東をその対極とみた構図は、いまいちど概念規定の吟味が必要である。

このように齊藤氏の研究は、地域に根差し微細微小な個別資料の執拗なまでの観察に立脚する一方、全国の研究動向の深い理解に根差した東西日本の相対化をなしとげた点が特筆される。

古墳時代の刀剣研究は、装飾大刀の偏在する東日本・東海・山陰主導で行われ、地域ごとに議論に極端な濃淡があった。齊藤氏の一連の研究は、特に九州での研究の遅れを挽回して研究現状の克服をめざし、同一水準・精度で東日本（関東）と九州を同一地平上で論じたことに、今後の全国的議論を呼び起こすものと評価できる。

第6章が、古墳時代の倭王権を頂点とする連合体にあって、5世紀までの北部九州勢力が対外交渉を主導し、いわば倭王権の先導役としての役割を果たしたのに対し、第7章では、6世紀以降の倭王権の威信財体系の配布を手掛かりに、対外交渉窓口である北部九州に対し、王権が直接掌握を進めていく過程を明らかにしたといえる。

第8章では、刀剣や鉄鏃など地域形式や型式の抽出と分析を進め、在地生産が承認されている鉄器類と鍛冶具の共伴関係から生産実体に肉薄した本研究は、武器類の地域生産研究に大きく寄与するものである。

全体的に、一貫性のある論理的な叙述で多岐にわたる資料をブレずに束ねる一方、豊

富で具体的な精緻な図版と、それらを明快に配列した編年図や概念図、さらに大胆でわかりやすいモデル図を随所に配置し、今後単著として刊行されれば、古墳時代研究者・古代史研究者にひろく引用される内容となるだろう。

そして何より、本論文の締めくくりは230頁に示されたモデル図で、全国と九州では大刀の階層的序列が逆転することを指摘した。これによって、九州の特異な位相が明示された。ただその歴史的解釈については、倭王権の、外交を前提とした地域経営の論理か、それとも九州の主体性に王権が配慮した結果であるのかは本論文では明らかにならなかった。齊藤氏は威信財武器は倭王権中枢部からの上意下達の指揮命令系統の維持手段となったと考えるが、白村江戦における倭国軍の命令系統の不備を想起すれば、見かけの動員系統と、実際の指揮系統の構築とはヒアタスがあることは明らかである、この点、今後その二重性の読み解きと補訂が必要となる。

本論文は、若者らしい全国を視野においた野心的・意欲的な研究志向と、北部九州という地域に根差した地道さ、遠路を厭わず関東での調査が見事に融合し、論旨にも一貫性と独創性があり、将来の課題も明らかにされた。博士論文として十分な水準にあると評価できる。

2020年2月1日の審査でも、主査・副査の質疑によく答えていた。